

第3章 ボスニア・ムスリム民衆叙事詩の成立とムスリム民族意識の形成

栗原 成郎

1. セルビア民衆叙事詩とセルビア民族意識

民衆英雄叙事詩は、それを口承文芸として伝承してきた民族にとっては、民族意識の形成・発達と無関係ではあり得ない。例えば、セルビア人にとっては民衆英雄叙事詩は民族としての自己証明の要因の一つとなっている。セルビア人の民族意識はコソヴォの記憶と意識下の深いところで結びついている。1389年のコソヴォ平原でのオスマン軍との決戦はセルビアに死をもたらした。セルビアの死を悼む精神的儀礼から叙事詩が生まれ、叙事詩を歌い継ぐことはセルビアの復活・再生の希望へとつながった。セルビア民衆英雄叙事詩は民族の悲劇を契機として誕生している。セルビア人にとってコソヴォは失われたエルサレムであり、回復されるべき永遠の聖地なのである。コソヴォの記憶としてのセルビア民衆英雄叙事詩はセルビア人の民族心性の特質を形成している。

民衆英雄叙事詩の発生の時期と環境を確定することは困難である。スラヴィストのヤギッチ V.Jagić はその数多い論文においてセルビア叙事詩の形成を、1389年のコソヴォの戦いが衝撃となって民衆叙事詩の創作を活発にしたと考え、14世紀末に関係づけた。文学史家のマレティチ T.Maretić もほぼ同じような意見を述べている。彼の見解によれば、セルビア・クロアチア民衆叙事詩の成立の時期は15世紀の初頭、すなわち1389年のコソヴォの戦いの後まもないころであり、14世紀末以前にセルビア人あるいはクロアチア人が英雄叙事詩を有していたことを実証することはできない¹。

旧ユーゴスラヴィアを構成していた諸民族は、スロヴェニア人を除き、いずれも自分たちの英雄叙事詩をもち、それぞれに独自の特徴、独自の英雄たち、独自の主題をもつ。

セルビア、クロアチア、ボスニアの口承文芸における英雄叙事詩は長い形成過程をもつ。英雄叙事詩の多くの要素は古く、初期封建制の時期に漸次積み重ねられていったが、その開花は遅く、“国家的なもの”(государственность)の形成・発達と異民族(特にオスマン・トルコ)との戦いがあった(しかもその戦いが悲劇的であることによって)はじめて、民衆詩歌として理念的内容と主題と英雄たちが備わって形成されるにいたった。

民俗学においては、歴史主題の民衆英雄叙事詩発生の基盤となったのは葬礼泣き歌であった、という考え方がかなり広まっている。この見解に対しては賛否両論あるが、英雄の死に際にして哀悼の儀礼が伴われたことは否めない。

英雄たちの埋葬に際して彼らを讃える歌がうたわれたという証言が伝存する。セルビア

¹ Maretić, Tomo. *Naša narodna epika*. Nolit, Beograd, 1966, pp. 29-30.

の歴史家ブランコヴィチ Đorđe Branković (1645—1711) はその著作『スラヴ・セルビア年代記 *Slaveno-serbske hronike*』においてパヴレ侯と軍司令官のバトーリイがオスマン軍を撃破した 1465 年の戦いの戦勝祝いの折りに戦死者の亡骸のそばで英雄叙事詩が歌われたことを報じている。

セルビア民衆英雄叙事詩には、コソヴォ歌群の歌や『プリエズダ侯の死』や『カイツァ侯の死』などがそうであるように、英雄たちの死を語り、死後に彼らの勲功を讃える歌が多い。また、『ラザル王とミリツァ王妃』、『コソヴォの乙女』、『ユーゴヴィチ兄弟の母の死』のように、英雄の死を悼む妻、姉妹、母、娘などの女性たちが登場するのもセルビア民衆英雄叙事詩の特徴でもある。

セルビア民衆英雄叙事詩がコソヴォの戦いにおけるセルビアの死を悼む儀礼から誕生したということは、それが葬礼泣き歌 (тужбалице) から生じたということは意味しない。民衆英雄叙事詩は、特有の歌い出し、結末、共通箇所、主題などによって、泣き歌と截然区別される。

民衆英雄叙事詩は、葬礼泣き歌の要素を含めて、口承文芸のさまざまなジャンルの諸要素の複合体を基盤として発達した。

南スラヴの民衆英雄叙事詩は、セルビア、クロアチア、ダルマツィア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、ブルガリアにおいて、1389 年のコソヴォの戦い以後、オスマン・トルコの南スラヴ諸国の征服と支配の歴史の流れに沿って地方的な出来事や人物たちと関わりながら形成されていった。

ボスニア・ムスリム民衆叙事詩もこの歴史の流れのなかで形成された。

2. カラジッチの民衆詩歌論

ボスニア・ムスリム民衆叙事詩の成立を考えるにあたって、ヴーク・カラジッチ Vuk Karadžić の民衆詩歌論を考察の手掛りとしたい。

カラジッチは“ライプツィヒ版”とよばれる『セルビア民衆詩歌 *Народне српске пјесме* 第 1 巻』(ライプツィヒ、1824)の「序文」においてセルビア民衆詩歌の分類法、地方的な出所、構成、普及範囲、成立年代、主題、韻律法などについて自分の見解を述べている。ボスニア民衆叙事詩に関する箇所を抜粋・引用しておく²。

すべての我々が民衆詩歌は、人々がグスレの伴奏に合わせてうたう**英雄叙事詩**と、婦人たちが娘たちばかりでなく男たち、特に若い男たちがうたい、しかも二人の合唱でうたうことが最も多い**女性の歌**とに分けられる。女性の歌は一人ないし二人が単に**自分たちの**談話を楽し

² Сабрана дела Вука Караџића. Српске народне пјесме I (1841), Просвета, Београд, 1975, с. 558-583.

むためにうたわれるが、英雄叙事詩は、多くの場合、**他の人々にも聴いてもらう**ためにうたわれる。かくして、女性の歌が歌われる場合には、**歌**そのものよりも**歌うこと**自体に注意が払われ、英雄叙事詩が歌われる場合には**歌の内容**に注意が払われることが多い。今日英雄叙事詩はボスニア、ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロおよびセルビアの南部山岳地帯において最も頻繁に最もいきいきとうたわれている。これらの地域においては今日にいたるまでもほとんどすべての家にグスレがあり、ことに羊飼の小屋にはかならずグスレがある。グスレを弾けないような男を見出すことは困難であり、グスレ弾ける婦人や娘たちも多い[p.xvii]。

カラジッチは、“女性の歌”は自分が聴いたとおりに記録した、と言う。

“T”のしるしをつけた“女性の歌”は私がクラグウイェヴァツでサライエヴォ出身のジプシーの娘たちから聴いて書きとめたものであり、それらの歌はそこではイスラーム教徒のセルビア婦人たちによっても同様に歌われていた[p.xxxv]。

セルビアの民衆詩歌の年齢に関しては、**女性の歌**のあるものはどの**英雄叙事詩**よりも古い、とすることができるであろう。と言うのは、英雄叙事詩のうちコソヴォ以前の時代に起源する歌は少なく、ネマーニャ王朝[1168–1371]以前からのものは一つもない。一方、女性の歌のあるものは千年の古さをもつであろう。例えば、“王女の歌”や“ドドラの歌”のいくつかはそうである。セルビア人はコソヴォ以前にも古くから伝承されてきた英雄叙事詩をもっていたとは思いますが、かの時代の変化が人々にあまりにも強い衝撃を与えたので、実際に人々はそれ以前のことをほとんどすべて忘れてしまい、人々が再び物語や歌をつくりはじめたのはその時点からである[p.xxxvii]。

今日知られている英雄叙事詩の大多数は16世紀および17世紀からのものであり、アドリア海沿岸地帯の勇士たちやウースコク[海賊]たちに関するものである。彼らはボスニアおよびヘルツェゴヴィナからヴェネツィアの保護下にあった沿岸地帯に避難してきた者たちであり、そこからハイドゥクたちと同様に戦士団を組織して、ヴェネツィアの国境線をトルコ人たちの攻撃から守った。そのような歌はボスニアのイスラーム教徒のセルビア人たち[Срби Турског закона по Босни ボスニア・ムスリム人]によってもうたわれるが、ただ彼らが最も好んでうたうのは、自分たちの同胞がつねに勝利して、キリスト教徒の婦人や娘を奴隷にしたり、誘惑したりする歌である[p.xxxix]。

ここに引用したカラジッチの言葉はボスニア・ムスリム叙事詩の特質の一面をよく捉えていると思われる。ボスニア・ムスリム叙事詩はセルビア叙事詩あるいはクロアチア叙事詩の構成の型に倣って形成されているが、スルタンに忠誠を誓うオスマン軍のイスラーム戦士の武勲がうたわれる点でキリスト教徒の英雄叙事詩と異なる。

ボスニアおよびヘルツェゴヴィナにおいて伝承されていた英雄叙事詩は 19 世紀の末にサラエヴォ郷土博物館館長であった民俗学者ヘルマン Kosta Hörmann (1850–1921) によって協力者の助力を得て編纂され、二巻本の形でサラエヴォ郷土博物館の出版物として刊行された。『ボスニアおよびヘルツェゴヴィナにおけるムスリム民衆叙事詩』第 1 巻 (1888)、第 2 巻 (1889) がそれである³。第 1 巻には 39 篇、第 2 巻には 46 篇、合計 75 篇の叙事詩が収録されている。

ボスニアおよびヘルツェゴヴィナのスラヴ系イスラーム教徒(ムスリム)の民族意識はこのヘルマンの集成したムスリム民衆叙事詩に反映されている。しかしボスニア・ムスリム民衆叙事詩のなかにボスニア・ムスリム民族意識の反映を読み取ることは、個々の作品の綿密な分析と解釈を必要とする手間のかかる作業となるので、この課題は別の機会を得て試みることにする。ここではそれへの予備作業として、ボスニア・ムスリム民衆叙事詩に関するヘルマン以前の記録をたどり、初期のムスリム民衆叙事詩の成立の状況を考えておきたい。

3. 初期の記録

ボスニア・ムスリムの民衆叙事詩に関する初期の記録は、主として 16～17 世紀の旅行記、年代記、文学作品など文書性格を異にする史料の中に散見する。それらは偶発的な情報にすぎず、ムスリム民衆叙事詩の胚胎期の状況についての詳細な記述とはなっていない。

ボスニアおよびヘルツェゴヴィナで歌われたムスリム叙事詩に関する最古の信頼し得る情報は、16 世紀のスロヴェニア人、ベネディクト・クリペシッチ Benedikt Kuripešić (Curipeshitz, Kuripečić) の旅日誌の中に見出される。クリペシッチはハプスブルク家のハンガリー・クロアチア王フェルディナント I 世の使節団のラテン語通訳として 1530 年にイスタンブールへの長い旅に出た。使節団の旅の目的はスレイマン II 世との和平交渉であった。クリペシッチの『旅行記 *Itinerarium*』は 16 世紀の最古のバルカン(ボスニア、セルビア、ブルガリア、ルメリア)紀行であり、オスマン時代のボスニアにおける最も早い時期のムスリム叙事詩伝承に関する情報を含んでいる。クルパ川 Krupa からカメングラード Kamengrad に向かう使節団の旅をクリペシッチは次のように誌している⁴。

³ *Narodne pjesme Muhamedovaca u Bosni i Hercegovini*. Sabrao Kosta Hörmann, savjetnik Zemaljske vlade za Bosnu i Hercegovinu. Knjiga prva, Sarajevo, Zemaljska štamparia, 1888; knjiga druga, Sarajevo, Zemaljska štamparia, 1889. この『ムスリム叙事詩』の第 2 版は 1933 年に出版されたが、興味ぶかいことに題名中の *muhamedovac* が *musliman* に変わっている。 *Narodne pjesme Muslimana u Bosni i Hercegovini*. なお 1966 年には Hörmann の手稿を整理した Đenana Buturović 編纂の同名の *Narodne pjesme Muslimana u Bosni i Hercegovini* が補遺として出版された。

⁴ Benedict Curipeschitz von Obernburg. *Itinerarium Wegrays, Kun. May potschafft(gen. Constantinopel) zu dem Türkischen Keizer Soleyman. Anno XXX-MDXXXI*. Benedikt Kuripešić. *Putopis kroz Bosnu, Srbiju, Bugarsku i*

馬の背に揺られての長旅ののち、我々は左手にヤプラ Japra とよばれる小さな要塞の古い城壁を見た。それから我々は谷間にくだって行き、ヤプラ川に出て川を渡った。そこで我々はカメングラードから 1 マイルほど離れた所でカメングラードから来た 50 騎ばかりの身なりの良い騎兵隊の出迎えを受けた。彼らは使節団を丁重に迎えた。そこにはマルコシッチ Malkosthitz (Malkošić) がいた。200 人の騎兵隊を指揮するヤプラ要塞の司令官である。彼らの英雄的な活躍はクロアチアとボスニアで盛んに歌われている。彼は使節たちと握手し、彼らと心を割って話をした。

ザグレブ大学教授で言語学者、文学史家であったマレティチ T. Maretić (1854–1938) はこの記述を 16 世紀ムスリム叙事詩についての「最初の信頼できる証言」としている。

民衆叙事詩に関するクリペシッチの記録は情報として多重的な重要性をもっている。それは、ヤプラ要塞の司令官マルコシッチの人物像についての歴史的証言であり、彼がその軍功のゆえにクロアチアとボスニアにおいて同時代の民衆によって歌われていた英雄であったと同時に、対立者側と率直な対話ができただけの軍人であったという情報であるからである。

文学史家でベオグラード大学教授であったラトコヴィチ V. Latković (1901–65) によれば、マルコシッチはクリペシッチの旅の当時はまだ若者だったという⁵。現存の人物について武勲詩が歌われていたという証言は、叙事詩伝承の流れを研究するうえで非常に重要な情報である。

ところが、Malkosthitz なる歴史的人物を確認する作業は困難をきわめた。

Jagić や Maretić は Malkosthitz を歴史上の人物としては特定することはできなかった。彼をトルコ人、マルコッチ・ベイ Malkoç-beg の家門の出とする説や、イスラーム教改宗者と考える見解などが提起されたが、現在、定説となっているのはハズィム・シャバノヴィチ Hazim Šabanović の研究成果である⁶。シャバノヴィチによれば、Malkosthitz は Osman の子たるマルコッチ・ベイ Malkoč-beg であり、クリペシッチの旅の頃はカメングラードの司令官であったが、1562 年にはヘルツェゴヴィナのサンジャク・ベイ(県軍政官)となり、1565 年には Klis クリスのサンジャク・ベイとなった人物と同定した。すなわち、彼はすでに純然たるボスニア・ムスリムであり、ボスニア・ムスリム叙事詩の最初の英雄の一人となったことになる。

このように、ボスニア・ムスリム叙事詩は、他の南スラヴの民間伝承と同様に、歴史の流れのなかでの自然発生的な伝承であることを示している。

Malkoč-beg は、現在は、民衆叙事詩の主人公としてはほとんど知られていない。

Rumeliju 1530, Svjetlost, Sarajevo, 1950 (Đorđe Pejanović によるセルビア・クロアチア語訳)。p. 13.

⁵ Latković, V. による上記 Kuripešić, *Putopis* の書評。Prilozi za književnost, jezik, istoriju i folklor, knjiga dvadeseta, sv. 3-4, 1954, Beograd, p. 334.

⁶ Evli Čelebi. *Putopis. Odlomci o jugoslovenskim zemljama*. Preveo, uvod i komentar napisao Hazim Šabanović. Svjetlost, Sarajevo, 1967, p. 214, Note 77.

マルコッチ・ベイは17世紀には叙事詩的英雄から伝説の主人公に変わっていた。オスマン朝トルコの旅行家エヴリ・チェレビ Evli Çelebi (Evljija Čelebi) はその『旅行記 *Seyâhatnamesi*』のなかでマルコッチ・ベイに言及しているが、マルコッチ・ベイに関する情報は17世紀の伝承に依拠しており、当人がなし得ないような事績をマルコッチ・ベイに帰している。チェレビは、マルコッチ・ベイが1553年にカメングラードを攻略した、と述べ、さらにクニン Knin 包囲の記述に際して「のちに1553年に Gazi Malkoč-beg はクニンを3年包囲し、それを占領したとき、町の城門の鍵を宝石で飾った小箱に入れてスルタン・スレイマンに送り “私は Van の町に似た城壁に囲まれた町を占領しました” という言葉を添えた」と記している。オストロヴィツァ Ostrovica の攻略もチェレビによればマルコッチ・ベイの軍功である⁷。これらのマルコッチ・ベイの事績は、時代錯誤や他の人物との混合を含んでおり、史実ではなくて伝説である、と考えられている。

しかし、チェレビの叙述におけるマルコッチ・ベイに関する17世紀の伝承は、ある英雄的人物を取り囲んでいた武勲詩的栄光が伝説へと変化していく過程を考える上での事例として興味ぶかい。

4. 補足的情報

16世紀後半のボスニアおよびヘルツェゴヴィナのムスリム人の社会環境において歌われていたムスリム叙事詩について、その発達の社会的条件を考える上での材料となる情報が二つある。

(1) その一つは、ハンガリーの詩人ティノディ Tinodi, Sebasthian (1505–60) によるムスリム叙事詩についての言及である。ティノディはハンガリーとトルコとのあいだのいくつかの戦役に参戦して戦闘の目撃者となり、同時代の出来事を韻文で綴った叙事詩に近い『年代記 *Chronica*』 (Kolosvar, 1554) を著した。この作品は Dmitar Karaman というセルビア叙事詩を “セルビア風に” 歌うセルビア人の吟遊詩人についての貴重な情報をもたらしている。ティノディによれば、カラマンは Lippa の町の Uluman-Paša の情熱をかき立てた。ティノディの述べるウルマン・パシャとはオスマン・トルコの陸軍軍司令官で、1541–1553年の期間ボスニアのサンジャク・ベイだった人物である。ウルマン・パシャはクロアチアおよびハンガリーへの軍事遠征に参加し、1551年に Morisz 川左岸の町 Lippa を攻撃した。ティノディは、おそらく、ウルマン・パシャがリップパの町を攻略した時にセルビア人吟遊詩人カラマンがボスニアのサンジャク・ベイとその麾下の戦士たちの軍功をたたえる武勲詩を “セルビア風に” 歌うのを聞いたもの、と思われる⁸。

⁷ Evli Çelebi *Putopis*. pp. 155-157, 172.

⁸ Stefanović, Svet. *Nekoji podaci iz mađarske književnosti za datiranje naše narodne poezije*, 1937. knjiga IV, sr. 1-2, pp. 27-35.

ティノディの証言から明らかなのは、16世紀なかばにムスリム軍陣営では武勲詩が歌われる伝統があったこと、ムスリム人の社会環境がキリスト教徒の *guslar* (グスレを弾きながら叙事詩を歌う吟遊詩人) たちを受け容れていたこと、彼らがムスリム人の聴衆のために喜んで英雄叙事詩を歌っていたという状況である。

(2) ムスリム叙事詩の発達過程に関するもう一つの情報はザグレブの民族博物館の館長を務めた歴史家リュビッチ *Šime Ljubić* (1822–96) によって古文書の中から引き出された。その情報を彼は *Šibenik* の長官が 1574 年にヴェネツィア政府に宛てて書いた報告書の中に発見した。シーベニクの長官はオスマン・トルコ軍の急襲について報告しているが、その中でイタリア兵の臆病さと“トルコ兵”の勇敢さとを対比させており、“トルコ兵”たちは窮地からの脱出に成功して自軍の陣地に生還すると、自分たちの英雄的行為を武勲詩として歌ったことを述べている。ここで言う“トルコ兵”とはスラヴ系ムスリム兵を指す。スラヴィストのムルコ *Matija Murko* (1861-1951) は、このリュビッチの発見をムスリム民衆叙事詩の“年令”を測定する上での貴重な情報としており、この史料で述べられているオスマン軍の陣営はシーベニクの近郷にあったと考えている⁹。

5. バシエスキヤの『サライエヴォ年代記』

ボスニア・ムスリム民衆詩歌の発達に関して貴重な記録を残した人物に *Sarajevo* の年代記作者バシエスキヤ *Mula Mustafa Ševki Bašeskija* (1731-1809) がいる。バシエスキヤは 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのサライエヴォの年代記を当時のサライエヴォで話されていたトルコ語で誌した。

バシエスキヤの『年代記』¹⁰はサライエヴォの民間伝承に関する貴重な情報を含んでいる。『年代記』には処々に *necrology* (死亡者記事) があるが、民衆詩歌と楽器に関係づけられて書かれている記事が興味をひく。楽器としてはドラム、ナイ [*naj*. デルヴィシユの用いた木笛]、サズ [*saz*. 柄の長いマンドリン様の楽器]、タンブラ [*tambura*. 一種のマンドリン] への言及がある。

1792 年 8 月 19 日から 1793 年 8 月 8 日までの期間の死亡者名簿の中には、*Vrlika* 某なる男の名があり、彼は戦争で捕虜となったが、時計づくりの職人で、美声で讃め歌をうたい、ナイの演奏の名手であったことが記されている。同じ期間の死亡者に *Mehmed-Paša Tambur* なる者があり、「晩年に多くの困難を経験し、病弱な老人であったが、サズ作りに優れ、この仕事にかけてはルメリアじゅうで彼の右に出る者はいなかった」と書かれている¹¹。

バシエスキヤの『年代記』に見られる情報の断片から 18 世紀の 80 年代には“*Turçija*”

⁹ Murko, Matija. *Tragom srpsko-hrvatske narodne epike*, I kniga, Zagreb, 1951, p. 451.

¹⁰ Bašeskija, Mula Mustafa Ševki. *Ljetopis* (1746-1804). Prevod s turskog, uvod i komentar Mehmed Mujezinović, V. Masleša (Kulturno nasljeđe), Sarajevo, 1968.

¹¹ Op cit. pp. 401-403.

と呼ばれる歌が大流行していたことが知られる。『年代記』の翻訳（セルビア・クロアチア語への）者で註解者の Mehmed Mujezinović はこの“Turçija”（トルコ歌謡）を“sevdalinka”と翻訳している。“sevdalinka”とはボスニア特有の恋歌・艶歌である。

1780-81年、kadi（法官）の身分の貴族青年たちが17名ほど集まって週に二回“おしゃべり宴会”を催し、身分の高い客たちがそこに加わった。7つのテーブルが置かれ、20皿から30皿の料理が並べられた。ナイが演奏され、恋歌がうたわれ、ありとあらゆる冗談が飛び交った。「このような放蕩は疫病の前兆である。そのことはアラーの神が最も良く知りたもう。疫病の猛威がおさまった後に残るのは記憶だけであり、昔は人々がいかにおもしろおかしく生活を送っていたかということが思い起されることになるであろう」とバシェスキヤは記している¹²。

1780年12月28日から1781年12月16日までの期間に死亡した者に Baba-Alija という男の名がある。「Baba-Alija、名前は Baba だが、baba（女）ではない。千年このかた現れたことのない herif（がさつ者）。貧乏だった。彼の立ち振舞と話しぶりは英雄並み。冗談を飛ばすことにかけては第一級の名人。タンブリツァの伴奏に合わせてボスニア英雄叙事詩を歌うことにかけて特に優れていた。タンブリツァの代用にときおりごく普通の木切れを用いることもあった。そのような折り、彼は英雄たちを讃え、敵の首をはねたものだ。腕と体全体を動かして歌った。かくして、彼がかつてドゥブロヴニクにいたとき、彼の芸の冴えっぷりを見た人々は彼の真似をした。彼を取り囲んでいた人々は彼を見て大いに笑った」¹³。

1795年7月18日から1796年7月6日までの期間の死亡者。「Salih Smailagić (Smailaga ogli)、saka(水運び人)、alemdar (旗持ち)、かわいい小男。楽器の演奏にたけていた。民謡を歌った。貧しく、晩年は nuskaždija (記録係) となり、またほら吹きとなり、最後は肺病で死んだ」¹⁴。

1795年7月18日から1796年7月6日までの期間の死亡者。「Jašar Šukrić、絶えず人と喧嘩をしていた喧嘩大将。老人で貧乏だったが、喧嘩と腕っぷしの強さにかけては彼の右に出る者はいなかった。彼はボスニアの国境地帯の英雄たちのことをすべて知っていて、一つの歌の中で全員を登場させることができた。彼はすべての英雄叙事詩をそらんじており、その点において英雄叙事詩の hafiz [コーランをそらんじている人] であった」¹⁵。

1797年6月26日から1798年6月14日までの期間の死亡者。「床屋 Jašar、少女の声でボスニア民謡を歌った」¹⁶。

1798年6月15日から1799年6月4日までの期間の死亡者。「Delija Mujo、95才、農夫。サライエヴォでは新参者で、百姓言葉で話した。彼はしばしば腰をおろしてボスニアの農

¹² Op cit. p. 250.

¹³ Op cit. p. 268.

¹⁴ Op cit. p. 420.

¹⁵ Op cit. p. 429.

¹⁶ Op cit. p. 441.

民の民謡を歌った。彼は農夫たちと付き合っていた。頭の良い男ではなかった」¹⁷。

このように、バシエスキヤの記録は、豊富で多様で生彩に富んだボスニア民衆詩歌に言及している点で興味ぶかい。

“Sevdalinka”はサライエヴォの上流社会の宴会で好んで歌われ、頹廢的な性格を帯びていたことが暗示されている。他に、細工職人のあいだで歌われるボスニア民謡、農民の生活環境の中で歌われる民謡があったことが分かる。

ボスニア・ムスリム英雄叙事詩の伝承者としては Baba-Alija と Jašar Šukrić の名が挙げられているが、前者がタンブラ（グスレではなく）の伴奏に合わせ、ときには木片をたたいて、大げさな身ぶり手ぶりで即興的に英雄叙事詩を歌ったこと、後者がムスリム英雄叙事詩に精通していたことなどの諸点において、18世紀末のボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム叙事詩の伝承を理解する上での貴重な情報となっている。

4世紀にわたるオスマン支配下のボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて見事な発達をとげたのは口頭伝承の民衆詩歌であり、それは叙事詩とセヴダリンカという二つの形で開化し実を結んだ。

民衆英雄叙事詩は三つの宗教グループ—東方正教、ローマ・カトリック、イスラーム教—のあいだで創造され、細部と彫琢において興味ぶかい相違はあるが、同一の言語的タイプ、同一の構造基盤、同一の時代的枠の中で発達した。いずれの民族—セルビア人、クロアチア人、ボスニア・ムスリム人—においても、民衆英雄叙事は日常生活の単調性を突き破り、民族精神を高揚させる力をもっていた。

¹⁷ Op cit. p. 451.